

村さんは筆まめで、何でも日誌に書いた。ある日、日誌を開いて見ると、自分のことが『あの野郎、なまいきだ』などと書いてある。何とかやつつけてやりたかったが、筆でも到底、荻村さんに太刀打ちできなかった。

今まで、大学や仕事の上で、いろいろな知り合いを持ったが、西高卓球部で知り合った人達が、一番心おきなく、なつかしく、二十数年会わなくても、会えばたちまち昔の友達にもどってかざり気のない話ができるのは、うれしいことである。昨年の秋にも、かつてのチームメイトである大橋君に再会し、ゴルフを教えていただいた。

また、同じく原田君などは、少年時代からの厚かましさ、年と共にみがかかかって来た感じであるが、どういう因縁か、ここ数年の雀友、ゴルフで、親しくおつき合ひして戴いている。

社会に出てからの友達、何かしら利害や競合の関係がある、会えば心の安まるという友達はなかなかできないものだ。そういう意味でも、西高卓球部の三年間は私にとって人生の中で、実に貴重な時代であった。今の現役の人達にも、是非、こういう時期を大切にもらいたいと思う。

西高時代の思い出

五期生 久保田 四郎

国際的なスポーツとして、檜舞台におどり出た昨今と違って、昭和二十六年頃の私が在学していた頃は、終戦後の混乱期を脱せず、経済的にはきびしい時代であって、とても世界に歩を進めることのできない状態であった。然し、国内にあってはアメリカ進駐軍のもたらした功罪の功であろうか。活発な活動が続いていたし、我々の耳にも関大の藤井という名前（後にプロに転向）は未だに残っている。高校界に於いては、レベルの高かった東京地区で、西高の名前などは出る幕もなかった。

先日、世界一の対決と見られる日ソ女子バレーボール戦の手に汗にぎる熱戦と、必死の応援をテレビの画面に見て、久し振りに興奮したものだが、同時に、二十数年前の東京地区優勝の興奮を再現した感があった。

参加選手全員の必死の、声の枯れんばかりの応援、熱戦好プレイから産み出す波打つ感動、それにも勝る母校愛、勝ち取った優勝の喜び、まざまざと頭の中に浮かんで来る。

当時、東京地区には菓麗なフォームと確実な攻め着実な守

りで有名なサウスポー（何か野球みたいになりますが）の富田選手が一世を風びして居り、西高で一番強かった荻村さんでも仲々ベストエイトに顔を出せないような時代であった。

校内にあつては、焼け残りのポロ体育館の中にあつた三台の卓球台（一台は大橋氏の寄付による）、ベルが鳴るのを待ちかねて先陣争い、台の確保に努めたものだった。

昭和二十五年の憲法大会、場所は城北体育館。

出場選手（然しレギュラーのみ）甲子さん、荻村さん、市川さん、亀田さん。

数々の予選を勝ち残り、当時卓球名門の小石川高校が決勝相手。T、甲子、2、荻村、M、荻村・亀田組、4、市川、L、亀田、の順序でメンバーが組まれたような気がするが、年の為、危ふな点は御勘弁戴きたい。

誰しもの予想は小石川高校の圧倒的勝利間違いない、との前評判の中にあつて、好試合を展開し、堂々と五分以上にわたり合い勝利をものにしたのであるから立派なものだ、三対二で勝つたように思うが、五対〇としても良いような試合振りであつた。

笑い話であり、又実質知らずのうちに使っていた言葉ですが、リードした選手に大声で「気をおとすな！ 気をおとすな！」と声援したのですが、気をおとすことは失心することであり「気をゆるめるな！」と応援すべきであつた、と。

優勝、祝賀会の事は記憶がない。きびしい時代だけに賞状

はあつたのであろうが、カップはどうだったか？ 素晴らしい成績の割に、みかえりが少なかつたが、なびかせた名声は大きかつた。後にも先にも東京都で優勝したのはこれ一回ではなかつたかと思う。後輩諸君諸姉や如何ん？

川嶋、藤崎、井上、加藤諸先生、柔和な田中さん、理詰めできびしがつた荻村さん、面白かつた市川さん、女子高との対外試合をすすめた亀田さん、その他岡崎、市川、田辺、青木、花井、藤田、大橋（途中慶応へ転校）原田、竹内、加納、中村、平川、三玉、加藤その他の沢山の方々の懐しい顔（敬称略）市川さんは二人居られ何時もエテさんエテさんと下級生の我々でもニックネームで呼ばせてもらつていた。

今では家族の立派な親父、社会では各方面での重鎮になられ活躍されて居られるであろうと想像し、創立初期の時代の憶い出新たに、一度お会いしたいと念じて居ります。

「後記」小生、高三年で一年休学し、卒業は五期となりましたが、卓球仲間では二・三・四期の方が頭に浮かび、五期以降の方には失礼致しました、女性では五期の斉藤さんが非常に懐しく憶い出されます。二十数年経つた今日記憶に誤りのある点は御容赦載きたい。